

大阪企業家ミュージアムの一〇年——経済史・経営史研究実践の試み——

宮本 又郎

一 大阪企業家ミュージアムの設立経緯

(1) 「商業博物館」から「企業家ミュージアム」へ

博物館といえ、王侯貴族の宝物や高級美術工芸品を対象としたもの、あるいは民俗学的遺物を対象としたものなどが大多数であり、経済やビジネスをメイン・テーマとするミュージアムはほとんどなかった。博物館というものが、各時代の文化の精華を、また文明の進化の過程を後世に伝えるものであるとするならば、これは大いにバランスを失っている。なぜなら、経済やビジネスは文明や文化を構成する重要な一部分であり、人々の経済行動の様式や理念、経

済生活において造り上げてきたシステムや慣習、施設や道具などもまた文化的な営為そのものであるからである。それならば、古今東西の企業家たちがたどってきた道やかれらが生み出してきた文化やビジネスの仕組みを説きおこし、ビジネスを通じてひろがる人類文化の未来を展望するミュージアムを構想すべきではないか、そして、古来、経済都市として発展し、これからも世界のビジネスセンターとしての役割発揮を期待されている大阪こそは、このミュージアムを建設するに最もふさわしい都市であるばかりか、建設の義務を負っているのではないか。

このような理念に基づき、大阪商工会議所が大阪市と協

力して、二〇〇一年六月五日に設立したのが「大阪企業家ミュージアム」（大阪市中央区本町一―四―五 大阪産業創造館内）である。大阪市が旧東区役所跡に建設する建物（大阪産業創造館）にミュージアム用のスペースを提供し、大阪商工会議所は創立一二〇周年事業の一つとして、ミュージアム開設資金約五億円を会員からの寄付金で調達し、開館後の運営費は大阪商工会議所の経常費で賄うという役割分担となった。

実はこのミュージアムは一九九〇年ごろから検討が始まった。「商業博物館」構想に端を発している。大阪商工会議所は会員に多数の老舗企業を擁しているが、船場などの市街中心部に存在している企業・商店から古い貴重な史料や道具類の滅失、散逸を嘆き、これらを展示、保存する「商業博物館」を設立しようとの声があがり、大阪商工会議所に構想委員会が設けられ、作道洋太郎大阪大学名誉教授らを中心に検討が重ねられたのである。この委員会には私も参加し、数年の討議を経てコンセプトがほぼ固まったが、その後、バブルの崩壊による経済情勢の変化などもあって、この構想の実現は頓挫することとなった。その後、大阪商工会議所では一九九七年から検討を再開することとし、私や

加護野忠男神戸大学教授らが招集された。そこで、これまで古文書や歴史的遺物などモノを中心に考えてきたコンセプトから、大阪が輩出してきた数多くの企業家たちの行動や精神に光をあてる、いわばソフトを重視したミュージアムに変更することが決まった。

大阪はこれまで幾多のすぐれた企業家を輩出してきた。何がエネルギーシユな企業家活動をもたらしたのか？ 旺盛な企業家精神を発揮した人はどのような人だったのか？ 彼らはいずれも高い志のもと、従来の延長線上ではない新たな発想に立ち、逆境をもともせず積極果敢に挑戦し続けた。このような企業家と企業家精神をテーマとした他に類を見ないユニークなミュージアムを建設する、これが新しいコンセプトとなった。

大阪が輩出した企業家たちのチャレンジぶりやイノベーションの数々を、その時代背景とともに紹介することにより、企業家や企業家精神が社会経済の発展の原動力としていかに重要な役割を果たしてきたかを伝えるという展示機能と、開設講座などを通じて次代の企業家輩出を図る人材育成機能、さらにこれらを支える研究機能を果たすことが大きな目的として設定された。そして、大阪大学の阿部武

司教授、沢井実教授、滋賀大学の小川功教授、京都学園大学の上川芳実教授、和歌山大学の上村雅洋教授などにも参加頂き、具体案の検討を進めることになった。

## (2) 産学連携

大阪企業家ミュージアムの具体案を検討するにあたって困ったことは、大阪商工会議所側にも、企画委員の経営史研究者にも、ミュージアムづくりの経験がないことだった。そのため、日本のみならず世界の産業、企業関係ミュージアムの研究、実地調査をしようということになった。しかし、それにはお金が要る。

こういう我々に幸いだったことは、一九九九年から文科省が科学研究費補助金に「地域連携推進研究費」というジャンルを設けてくれたことであった。この科研費は、大学研究者と各地域の自治体、産業団体、研究機関などが連携して、地域の問題を研究するプロジェクトに対して交付されるといえる。私が研究代表者となって、大阪大学の経済史・経営史研究者（猪木武徳、阿部武司、沢井実、佐村明知、杉原薫、鳩澤歩、中島裕喜）と加護野忠男教授、小川功教授、廣田誠神戸学院大学助教教授に参加してもらい、大

阪商工会議所を連携先として、「関西企業家ライブラリーの構築」をテーマとしてこの科研に応募したところ、幸いにも一九九〇〜二〇〇一年度について総額四一、三〇〇千円の研究費を頂けることになった（課題番号一七九一〇二五）。大阪商工会議所が準備した資金と科研補助金に支えられて、我々は次のようにミュージアム構想の具体化を進めた。

① 国内外の産業関係ミュージアム、史料館などの視察、調査

国内については、渋沢史料館、住友別子銅山記念館、倉紡記念館、筑豊の石炭記念館、五個荘近江商人博物館、トヨタテクノミュージアム産業技術記念館、住友史料館など三一施設の視察を行った。海外については、アメリカのHenry Ford Museum（ディアボーン市、フォードミュージアム）、Newseum（アーリントン市、新聞博物館）、National Museum of American History（ワシントンDC、国立アメリカ博物館）、Smithsonian Museum（ワシントンDC、スミソニアン博物館）、Intel Museum（サンノゼ市、インテル博物館）、the Tech Museum of Innovation（シリコンバレー、イノベーション博物館）、フランスのMusée Historique des Tissus（リヨン市、織維博物館）、Musée des Arts Décoratifs

(リヨン市、裝飾博物館) Musée de L'imprimerie et de la Banque (リヨン市、印刷と銀行の博物館) ベルギーの Museum voor Industrial Archeologie en Textile (アントワープ市、産業考古学および繊維産業博物館)、中国の上海紡織科学研究院(上海市)、旧内外綿工場(上海市)、海瀾集団(上海市、アパレル企業)、紡織博物館(南通市)、蘇州市の生糸・絹織物工場などの視察、調査を行った。視察した施設では、「企業家」に特化したミュージアムはなかったが、展示方法では Newseum、Intel Museum、Musée Historique des Tissus が参考になったし、ミュージアム・マネジメントについては、アメリカのミュージアムのそれに学ぶところ大きなものがあつた。

② 展示企業の選定基礎資料の作成と企業家デジタルアーカイブの作成

大阪企業家ミュージアムにおいて展示その他で対象とする企業家は、大阪出身もしくは大阪を主要舞台として活躍した人々に限ることにしたが、それでも第一次候補者数は三〇〇余名となった。この第一次候補者について文献、史料などを収集し、各研究分担者が調査研究を行い、展示する企業家選定の基礎資料の作成を行った。選定した企業家

については一定のフォーマットに基づき作成したテキスト形態のレポートを基礎に、映像資料を加え、コンピュータ可読型のデータ・ベースを作成した。これが後述の「関西企業家デジタルアーカイブ」となった。この作業には、科研費分担研究者のほか、作道洋太郎大阪大学名誉教授、上村雅洋和歌山大学教授、柴孝夫京都産業大学教授、三宅宏司武庫川女子大学教授、鈴木謙一甲子園大学客員教授、高岡美佳大阪市立大学助教授、住友史料館の山本一雄氏・末岡照啓氏・今井典子氏・安国良一氏、ジャーナリストの石黒英一氏、河内厚郎『関西文学』編集長、それに大阪商工会議所職員などにも加わってもらつた。

③ 「関西企業家映像ライブラリー」の作成

現存する重要かつユニークな企業家について、インタビュー調査を行い、それをビデオ映像化し、後世へ歴史記録として伝えるとともに、編集して大阪企業家ミュージアムでの展示利用に供することにした。この事業については、企業家と親交のあるジャーナリスト、鈴木謙一氏(元日本経済新聞社)、吉田時雄氏(元産経新聞社)、岡田清治氏(日刊工業新聞社)、折目允亮氏(関西ジャーナル社)の助けを借りることが多かつた。

以上のように、ミュージアムのコンテンツづくりは、学術研究者、ジャーナリスト、各企業、それに大阪商工会議所職員など多くの方々の参加によって可能となった。まさに産学共同での作業であった。そして、この産学連携を精力的に推進されたのは大阪商工会議所松本道弘常務理事と天満清人材開発部課長であった。このお二人の獅子奮迅の活動がなければ大阪企業家ミュージアム構想は実を結ぶことがなかったであろう。

## 二 大阪企業家ミュージアムと企業家研究フォーラム

(1) ミュージアムのコンテンツ  
大阪企業家ミュージアムは二〇〇一年六月五日、オープンとなった。初代館長には井植敏氏(当時、三洋電機会長)が就任された。コンテンツを紹介しておこう。

館内はプロローグシアター、主展示場、ライブラリーの三コーナーで構成されている。プロローグシアターでは、豊臣秀吉や江戸時代にさかのぼり、大阪の企業家精神のルーツや企業家を育んだ風土を約一三分のビデオで紹介している。

続く主展示は「企業家たちのチャレンジとイノベーション」というタイトルで、大阪を舞台に活躍した企業家五人の足跡をパネルやめくり資料で紹介している。彼らが単に何を成し遂げたかだけでなく、「なぜ」「どのような思いで」「どのようにして」という観点に重きを置き、分かりやすく記述・展示している。併せて、松下幸之助が考案した二股ソケットや発売当時の「グリコ」「赤玉ポトワイン」「ヤンマーディーゼル」など企業家にゆかりのある代表的な開発商品や記念品、遺品も展示している。

パネル展示された一〇五人の一覧は表1の通りである。一〇五人に絞ったのはスペースの関係からで、まず明治維新以降に限ることにし、ついでテーマ別、時代別、産業別にバランスよく選ぶこととした。また、その人物についての学術的研究の有無、資料の入手可能性も考慮した。この人選について、時として「ベスト一〇五人」かという誤解があるが、決してそうではないのである。

さて、主展示は三つのブロックに分けられている。第一ブロックは「近代産業都市大阪の誕生―産業基盤づくり―」として、近代大阪のインフラ建設に貢献した五代友厚に始まり、日本の産業革命の道を切り開いた繊維業と商社関係

表1 大阪企業家ミュージアム主展示企業家一覧

第1ブロック		第2ブロック		第3ブロック	
業種	企業家名	業種	企業家名	業種	企業家名
財界リーダー	五代友厚 松本重太郎 藤田伝三郎 広瀬幸平 中橋徳五郎	建築	大林芳五郎 竹中藤右衛門(14代) 辰野金吾 片岡 安	財界リーダー	杉 道助 谷口豊三郎 日向方齋 佐伯 勇
	繊維		山邊丈夫 菊池恭三 武藤山治 稲畑勝太郎 大原孫三郎 大原總一郎 津田信吾 樫山純三 石本他家男		薬品
電鉄		小林一三 今西林三郎 太田光熙 大塚惟明 金森又一郎		電機	
		商社		伊藤忠兵衛(初代) 伊藤忠兵衛(2代) 岩井勝次郎 安宅弥吉	久保田権四郎 山岡孫吉 栗本勇之助 中山悦治 E.H.ハンター 範多竜太郎 椿本説三 小林愛三 新田長次郎
金融	野村徳七 弘世助三郎 片岡直温 岩下清周 小山健三 藤本清兵衛 堀田庄三 渡邊忠雄 寺尾威夫		重工業		
		新生活消費財		水野利八 井上貞治郎 黒田善太郎 伊藤喜十郎 西村俊一 中山太一 市川銀三郎 田嶋一雄 島野庄三郎	流通
洋風食品	鳥井信治郎 江崎利一 浦上靖介 浦上郁夫 鳥井駒吉		食品		
		レジャー ショッピング		吉本せい 林 正之助 白井松次郎 大谷竹次郎 飯田新七(4代) 下村正太郎(11代)	新聞

の企業家、それに新しい金融の仕組みをもたらした人物が取り上げられている。

第二ブロックは「大衆社会の形成—消費社会の幕開け—」として、近代建築業、製菓業、鉄道開発、重工業、洋風の消費財・食品、レジャーとショッピング、それに新聞などの発展に寄与した人物が登場する。いわゆる「大大阪」の時代、大阪では人口が急速にふくれあがった。高速輸送機関としての電鉄を、住宅地、教育・レジャー・文化施設、ターミナル・デパートなどの開発と関連づけて経営しようとした小林一三が現れ、都市にはこれまでにはなかった大衆消費社会が芽生え、これに応えようとする新商品群が多数登場することになった。赤玉ポトワイン、クレパス、魔法瓶、オムライス、カレーライス、グリコ、カメラ、カルピス等々であり、いずれも大阪の企業家たちが開発したものだ。

第三ブロックは「豊かな時代の形成—復興から繁栄へ—」として、戦後の電力不足解決に大きな役割を果たした黒田ダム建設の太田垣士郎、プレハブの石橋信夫、消費文化を開花させた家電の松下幸之助や流通革命をもたらした中内功、インスタントラーメンの安藤百福などが登場し、サン

トリーの佐治敬三が掉尾を飾っている。

一〇五人の出生地をみると、大阪二〇人、兵庫一一人、京都九人、京阪神で計四〇人（三八％）となっているが、この比率はむしろ少ないといえるであろう。大阪で活躍した企業家といえども、決して根っからの大阪人ではなく、西日本を中心として各地から大阪にやってきた人々がこの地にイノベーション、活力をもたらしたのである。

主展示場が続いてライブラリーコーナーがある。そのコンテンツの一つが先述の「関西企業家映像ライブラリー」である。これは関西の有力企業家とそのライフ・ヒストリー、企業家としての足跡を語ってもらい、それをビデオ映像に編集したオリジナル・コンテンツである。新井正明（住友生命）、安藤百福（日清食品）、井植敏（三洋電機）、家城福一（日販製作所）、石橋信夫（天和ハウス工業）、稲盛和夫（京セラ）、伊部恭之助（住友銀行）、岩谷直治（岩谷産業）、鬼塚喜八郎（アシックス）、葛西健蔵（アップリカ葛西）、亀井正夫（住友電気工業）、黒田暉之助（コクヨ）、佐々木正（シャープ）、鈴木謙一（日本経済新聞社）、中内功（ダイエー）、中野秀雄（吉本興業）、能村龍太郎（太陽工業）、細川益男（ホソカワミクロン）、松下正治（パナソニック）、村井勉（東洋工業、ア

サヒビル)、和田亮介(和田哲)の二一氏についてのビデオが公開されている。いまではほとんどの方が故人となられており、これらの方々の生前の肉声を伝える貴重な記録となっている。

企業家の生い立ちから活躍に至る事績を写真も交えパソコンで紹介するデータ・ベース「企業家デジタルアーカイブ」も当ミュージアムのオリジナル・コンテンツである。各企業家について研究者やジャーナリストなどが専門の立場から執筆したもので、現在二二〇人の企業家についてのアーカイブが完成している。蔵書としては、もと大阪商工会議所図書館に所蔵されていた企業家の伝記・小説・自伝、各社の社史などを含み、現在、文献七七六〇冊、DVD六八点が所蔵されている。

## (2) 「企業家研究フォーラム」の設立

ミュージアムには展示機能、人材育成機能だけではなく分であるとして、開館年の二〇〇一年十二月に「企業家研究フォーラム」という学会が設立された。「大阪企業家ミュージアムと連携し、企業家活動研究の促進とその成果の普及を図るとともに、経済社会が真に求める人材の育成に資す

ることを目的とする」(同フォーラム会則第一条)との趣旨に、研究者ばかりではなく、法人企業や実務界の人々などが応募、設立一〇年を経過した二〇一二年九月現在、一般四三六人、法人三〇社が会員となっている。初代会長に私(宮本又郎)が、副会長に加護野忠男氏(当時、神戸大学教授、現甲南大学特別客員教授、大阪経済大学客員教授)が就任したが、現在には会長・宮本、副会長には加護野教授のほか、橘川武郎一橋大学教授、金井一頼大阪商業大学教授、沢井実大阪大学教授が加わっている。

同フォーラムでは、年次大会のほか春夏秋冬に研究会を開催、機関誌として『企業家研究』(二〇一二年九月現在、第九号まで)を発行している。年次大会では各回とも「共通論題」が掲げられ、当該テーマにつき半日のパネルディスカッションを行っている。これまでの共通論題は次の通りである。「企業家学の課題と可能性」「変革期における企業家輩出の条件」「企業家の意思決定を再考する」「企業家の特異条件―狂気・異形・才覚の経営人類学的研究」「M&A、TOB等のハイリスク分野で活躍した企業家群像の実像と虚像」「まちづくりのリーダーシップ」「企業家と信頼・出会い、ネットワークそして運」「老舗と企業家精神」「地域



産業の新陳代謝と企業家育成の国際比較」「女性企業家の多様性と可能性」「リーダーシップのあり方―財界の機能をめぐって―」。

なお、企業家研究フォーラム設立にあたっては、大阪商工会議所から大西正文第二代会頭顕彰事業として、「企業家研究基金」二〇〇〇万円が設定された。フォーラムでは、この基金を主として、大学院生を対象とした「企業家研究助成金」（二件三〇万円を上限とし、毎年一〇〇万円）に活用している。また、「企業家研究フォーラム賞」を設け、企業家研究の分野で優れた成果を挙げた著書、論文を表彰している。

### 三 大阪企業家ミュージアムの一〇年

#### (1) 来館者

開館以来一〇年間の来館者数は表2の通りである。緩や

表2 大阪企業家ミュージアム来館者数

年度	来館者(人)
2001	9,450
2002	9,624
2003	10,948
2004	11,897
2005	13,985
2006	16,220
2007	14,972
2008	15,420
2009	14,323
2010	16,781
2011	17,964

注：2001年は6月5日～翌年3月末の数。  
他は4月1日～翌年3月末。

かにではあるが、毎年少しずつ来館者数は増えており、二〇一二年九月二十五日現在では累計一六万〇二六一人に達した。この種の地味なミュージアムとしては善戦しているといえよう。個人約三〇%、団体約七〇%、属性別では社会人約五五%、学生・生徒約四五%というところである。社会人団体では企業の新入社員や大阪赴任者向けの研修でよく使われている。学生・生徒については、大学のゼミやキャリア教育、近年では中高校生の修学旅行での利用が多い。外国人来館者も中国、韓国を主に七%ほどを占めている。日本語のほか英・中・韓の音声ガイドを用意して外国からの来館者の便を図っている。

アンケート調査(二〇一二年、個人来館者を対象に実施)では「大変満足」と「満足」合計が九四%となっている。「面白く、大阪らしいミュージアム、大阪にしかできないミュージアム、大阪でこそ意味あるミュージアム」「このような施設を構想し、実現した大阪の底力に感銘を受けた」「大阪からこれだけ多くの企業家が輩出されたことを初めて知った」などの声が寄せられた。

なお、初代館長井植敏氏は二〇〇八年一〇月をもって退任され、私(宮本)が後を継ぐことになった。また二〇〇

九年二月には経済産業省の「近代化産業遺産」に認定された。ミュージアムの運営は現在、大阪商工会議所人材開発部職員三名、同嘱託一名と派遣社員二名が、サポータースタッフの助けを借りて行っている。サポータースタッフ（現在男性一八名、女性二名が登録）はこのミュージアムの趣旨に賛同して来て頂いているボランティアの方々と、企業などでの実務経験豊富な方が多く、重要な戦力となっている。

## (2) 特別展示

ミュージアムではリピート来館者を迎えるためにも、絶えずコンテンツのリニューアルをはかることが必要である。本ミュージアムでは企画展示・特別展示でこれに対応している。これまでの実績は以下の通りである。

「五代友厚と企業家精神」（二〇〇五年）、「吉本興業「吉本せい・林正之助姉弟」」「ミズノ創業者 水野利八」（以上、二〇〇六年）、「三洋電機創業者 井植歳男」「鳥井信治郎・佐治敬三」（以上、二〇〇七年）、「大商一三〇周年・江戸から明治へ 変革期の企業家たち」「初代・二代 伊藤忠兵衛」（以上、二〇〇八年）、「データで見る老舗」（二〇〇九年）、「体験してみよう！ 真空の不思議」「商品を通じて 世の

中の役に立つ」〜今も生きる創業者の志 コクヨ創業者 黒田善太郎」「順天〜今に生きる創業者の想い 創業一二五年 大阪の老舗「桃谷順天館」創業者・桃谷政次郎」「神様になった企業家 上山英一郎」（以上、二〇一〇年）、「広告王 森下博〜森下仁丹 創業者〜」「進取の精神〜京阪百年 継承される企業家精神 渋沢栄一、太田光熙」「大阪企業家ミュージアム十周年・大阪の恩人 五代友厚」「マルキパン 水谷政次郎」「製品に見る 今に生きる企業家精神」「『順理則裕』〜道理に生き、繁栄する〜伝統と変革 東洋紡のあゆみ」「西の五代友厚、東の渋沢栄一〜近代日本の基礎を築いた二人のビジネス・リーダーとその企業家精神〜」（以上、二〇一一年）、「挑戦・創意工夫〜今活躍する企業家たち」「第五回内国勸業博覧会と企業家達」「シャープ一〇〇年 創業者 早川徳次〜危機を乗り越え続けた企業家」（以上、二〇一二年）。

特別展示の企画、コンテンツづくりは、関係企業、企業家の協力を得ながら、大阪企業家ミュージアムの事務局長（現在は興津厚志氏）以下スタッフの手づくりによって行われているが、ユニークな企業家展として好評を博している。

### (3) イベント・セミナーの開催

本ミュージアムでは展示事業のほか、さまざまなイベントやセミナーを開催してきた。社会人向けとしては関西学院大学ビジネススクールとの連携講演会「現代企業家の戦略的役割」、大阪大学連携講座「大阪の企業家群像」、ナイトミュージアム講演会、新入社員研修セミナー、大阪赴任者向け研修セミナーなどのほか出張講義も実施した。そのほか単発に話題の企業家に関する講演会を開催している。

大学生対象として「仕事を考えるセミナー」やインターン学生の受入れを行い、小中高生対象としては大阪市の「サマースクールシティ事業」や「OSAKA ジョブミュージアム事業、社会見学・修学旅行プログラム」などに協力したほか、「大阪の産業・企業の今昔を学ぶ」や出張講義も実施した。

また、二〇一一年二月四日には、「大阪企業家ミュージアム十周年記念フォーラム」を「西の五代友厚、東の渋沢栄一」をテーマとして、大阪産業創造館で開催した。私(宮本)と鹿島茂明治大学教授の基調講演のあと、米田道生大阪証券取引所社長、佐藤茂雄大阪商工会議所会頭・京阪電気鉄道会長を加えて、パネル・ディスカッションがあり、五

代や渋沢の企業家活動の現代的意義について、熱のこもった討議が繰り広げられた。聴衆二六〇人と盛会であった。

### (4) 刊行物

刊行物としては、開館当初の『大阪企業家ミュージアム・ガイドブック』『おおさかヒット商品絵巻』『大阪企業家列伝―大阪を創った企業家を調べよう』のほか、以下を加えた。『大阪企業家名言集』は展示企業家の名言六二件を収録したもので、販売に供している(一冊五〇〇円)。小中学生の企業家理解を助けることを目的として、漫画冊子『企業家の人生に学ぶ』を制作、現在、江崎利一・石橋信夫・早川徳次・上山英一郎・岩谷直治・久保田権四郎・佐伯勇の七人について刊行している。また、子どもゆめ基金の助成を受け「デジタルコンテンツで楽しむ企業家精神」小中学生のためのキャリア教育」を構築しインターネット上で公開 (<http://www.kigyokajp.yume>)。この中のコンテンツの一つとして、松下幸之助、安藤百福の企業家精神をアニメで紹介している。

## おわりに

企業経営者・幹部はもとより、学生やこれから起業しようという人は偉大な先人企業家の情熱や英知に学ぶことが何より肝要である。先人たちの努力のドラマから貴重なヒントと糧が得られるであろう。企業家研究を志す人、大阪を中心として関西の企業家のことを調べたい、勉強したいと思う人にも是非来ていただきたい。

同ミュージアムは、大阪商工会議所を中心として大阪経済界によって支えられてきたが、地味なミュージアムで独立採算が困難である以上、経済界・行政のみならず、より広い市民の応援が必要である。「この不況下に、何を呑気なことを」という声も聞こえてきそうだが、江戸時代の大阪の町人精神に大きな影響を与えた懷徳堂や石門心学は、元禄バブルが去った不況の享保時代に大阪町人のバックアップによって生まれたことを想起して欲しい。船場やベニスの商人の歴史が物語っているように、洋の東西を問わずビジネスマンは常に文化のプロデューサーであった。現代ビジネスが混迷に陥っているからこそ、ビジネスの神髄に触れ、その価値や夢を再び思い起こし、未来のビジネス社会

のあり方を構想する場が必要である。大阪が誇りとしてきた時代を先駆ける革新精神と果敢な行動力、才覚と英知を大阪企業家ミュージアムに結集してもらいたいものである。

### 〔付記〕

- ・肩書きについては特に記載のない限り当時のものとした。
- ・「現在」「現」については特に記載のない限り二〇一二年一〇月時点のものとした。

(みやもと またお・大阪経済大学客員教授、大阪大学名誉教授)

大阪企業家ミュージアム館長